

浅野：

分析結果の活用と 質保証強化

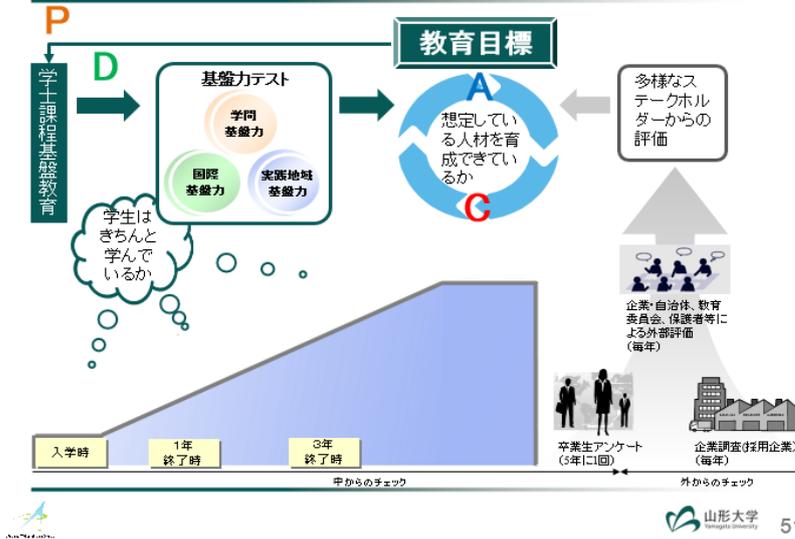
浅野 茂(山形大学 学術研究院)



まず、タイトルにもある通り、分析結果の活用ということで、全体のスキームからお話しさせていただきます。具体的には、千代先生からも御説明いただきましたけれども、本学は山形大学の教育目標に沿って、学士課程基盤教育を展開しています。実際に教育をやって、その結果や成果を基盤力テストの実施に

より見ていくということになっています。

分析結果の活用と質保証強化の全体像



それが何を意味するかと言いますと、こういった形を見たときに、まず入学時に入ってきた学生さん、そして1年間の本学での教育を経たあとに再度、テストを行います。そして、3年目になったときにもう一度テストを行うということで、学士課程教育における山形大学としての学習成果をこの基盤力テストで3

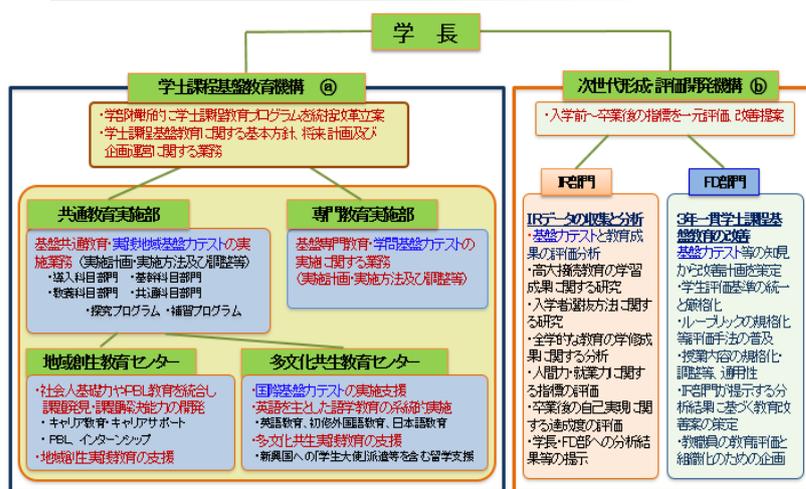
回測定して問うていこうというものです。実際のところ、やってみないと分かりませんが、願わくは、ここにありますように、学生さんの学習達成度がスムーズに上がっていきってくれるということを我々は狙っています。2報告目の安田さんの話にもありましたけれども、来年、実際に1年間の教育を経た後のテストを実施した際、もしかしたら θ がマイナスになるとうこともあるかもしれません。そのあたりをどうするかというのを考えないといけません、我々としてはこの3時点で少なくとも学生さんはきちんと学んでいるということ

を、いろんなデータから紐解いていくということをしなければならないと考えております。

最終的には4年目、あるいは医学部ですと6年目に卒業して、学生さんに満足して社会に出ていってもらうことが重要ですが、基盤力テストでは、学部に関わりなく、山形大学の学士課程で学んだ共通的部分を見える化しようとしています。そのため、他に卒業生アンケートであったり、企業さんの調査であったりを実施する必要もあります。また、新たに編成しています山形大学アライアンスネットワークというのがございまして、地域の皆様を中心に御協力をいただいているところではありますが、企業や自治体の方、あるいは保護者の方にも入っていただいて、山形大学の教育の成果を端的に評価していただくということを考えています。

そういったことをやりながら、ステークホルダーの評価、先ほど安田さんの話にもあった評価などを組み合わせて、こういったPDCAをしっかりと回していくことで、ここにありますように、我々が想定している人材がしっかりと育成できているのかということを確認しようということでもあります。

PDCA 教学マネジメント体制



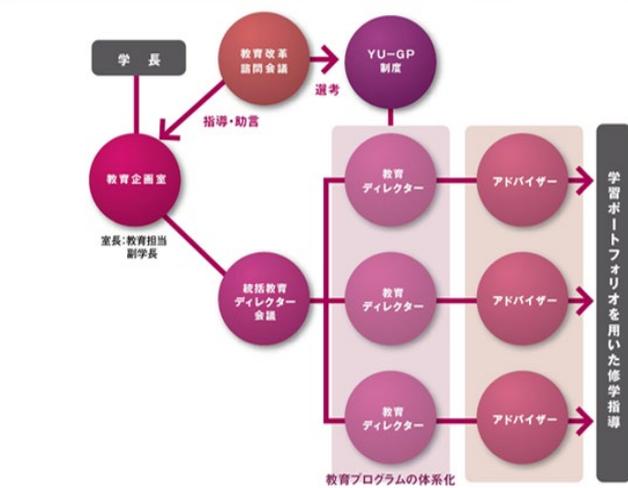
では、PとD、それからC、Aと、どのような形で進めようとしているのかというところを簡単に説明いたします。まず1つ目のPについては、これは全体に関わる場所でもありますけれども、まず山形大学でこれまでにお話ししたことを実行しようとする、全体のマネジメント体制が非常に重要になってきます。

これは学長の下に、学士課程基盤教育機構という全学組織を置き、そこで基盤力テストの開発に関わる部分と実施支援ということをやっています。また、学士課程教育をどのように進めていくのか、どのようなカリキュラム構成にしていくのかといったことも検討しています。

次に、Dについては、実際の教育になります。そしてその成果を確認していくCとして側面からサポートするのが次世代形成・評価開発機構です。当機構には、IR部門とFD部門というのがあり、CはIR部門が主たる担い手です。そして、CからAにつなげていくということで、安田さんのスライドにもありましたけれども、FDを中心に授業の改善であったり質の向上を進めていくことになりますので、CのIR部門AのFD部門がしっかりと連携して、取

集して分析したデータを活用できる体制に持っていくということを考えております。

PDA 教育ディレクター制度



<http://www.yamagata-u.ac.jp/ky-k/staff/02.html>

山形大学 53

この体制に加え、もう一つ山形大学には特徴的な制度がございます。これは教育ディレクター制度というものがございまして、基本的には各教育プログラムごとに教育ディレクターを配置し、この方々を中心にプログラムの体系化を行うという仕組みになります。通常、学科または専攻長ぐらいのレベルに相

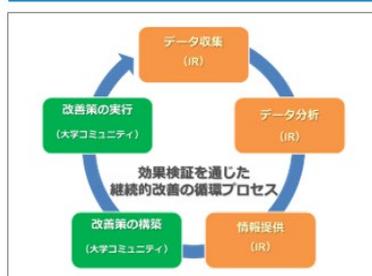
当する先生方を中心に、ある程度、責任を持ってカリキュラムの体系化をしていただくという形を取っています。これはかなり前からやっけていまして、平成21年度ぐらいから導入しておりますので定着している制度でございます。

CA 分析、効果検証、継続的改善の支援体制



・IE (Institutional Effectiveness)とは IR機能を活用して効果検証を行い、大学として継続的改善の循環プロセスを実行すること

・IR (Institutional Research)とは 客観的なデータ分析に基づいた大学における諸活動の効果検証及び、情報提供等を通じた大学の意思決定又は業務の継続的改善を支援すること



URL: <https://ir.yamagata-u.ac.jp/what-is-ir/>

山形大学 54

では、そのチェックとアクションの部分はどうするかということで、これがいま我々のほうで取り組んでいる OIRE (次世代形成・評価開発機構の IR 部門) で担当しています。ここでは、まずチェックの部分では先ほど藤原さんがおっしゃられました IR の分析をしっかりやるということ。それからもう一つですね、PDCA とい

ますと、こういった形で収集したデータを提供するのが IR ですが、そこから先、大学全体でどうやってそれを改善に結びつけていくのかという、アメリカでは Institutional Effectiveness という言葉使われていますけれども、IR から一歩先に、IR で通じて詳らかにした課題を、大学全体で改善まで結びつけていくという形で捉えているところです。その

ところにプログラムの特性を出していただくということをやりました。併せてカリキュラムの話が出てきますので、カリキュラムと、先ほど千代先生のお話にもありましたけれども、科目とポリシーの対応というのを取る作業を行っています。いろんなやり方のうち、山形大学でやっているのは、カリキュラムチェックリストを導入し、カリキュラムごとに DP と CP を配置し、ここにカリキュラムを持ってきて、シラバスに書いてある目的であったり目標と、それがどの CP、各プログラムを立てている CP に対応するのか、併せてどの DP と対応するのかということをやっています。

C ポリシーとカリキュラムの整合性確保

学部名： ○○学部 教育プログラムを○○学

教育課程の構成・実施方針 (CP)					カリキュラム				学位授与方針 (DP)			
CP1	CP2	CP3	CP4	CP5	科目名	担当教員	授業の目的	授業の到達目標	DP1	DP2	...	DPO
○	○				基礎生命科学	山形太郎 山形花子 他○○教員	医学の基礎知識として必要となる、化学、生物学、物理学及び生化学について、「医学教育における準備教育モデル・コア・カリキュラム」に準じて指導する。	(1) ○○に関する基礎的知識を把握する。 (2) △△に関する問題意識を持つ (3) ◇◇的なもの見方・考え方を身に付ける。	(1) △ (2) ◎ (3) ○			(2) ◎ (3) ○

○ CPと対応している
※ 該当しない場合は空欄

◎ DP達成のために、特に重要な事項
○ DP達成のために、重要な事項
△ DP達成のために、望ましい事項

現実問題として、各シラバスに先生方が書いていただいている到達目標が不揃いの状況もありますので、現在、この部分の修正も含めてやっています。千代先生のお話にもありましたけれども、質保証ということを考えたときに、現状多くの場合、先生が変わってしまうと、この目標まで全部変わってしまうとか、ある年度から

もうガラッと変わってしまうようなことがございますので、大学全体でこういったチェックリストを使って、ここまではもう大学全体のものとして、どの先生がいらっしやっても変わらないような状況を作っていくって、カリキュラムをなるべく体系化するということを想定しています。

皆さん、実際担当されている方がお困りのところがありますので、少しだけ紹介しますと、3ポリシーのガイドラインで、一体性という言葉が出てきていると思います。あるいは一貫性を確保する。我々が答える一つの考え方としては、科目と同時にその DP と CP の対応を考えていくということで、この科目は、このカリキュラムポリシーにとってはこういうところで必要であり、なおかつこの授業を通じて、この DP を到達に目指しているということを一眼で見られるようにするというを考えています。これらの作業を通じて、3ポリシーが一体性を有していることを示していこうというふうに考えています。

C 教育プログラムごとの情報発信

■ 学士課程（各学部）について

山形大学には人文社会科学部、地域教育文化学部、理学部、医学部、工学部、農学部の6つの学部があります。全学の学士課程とそれぞれの学部、学科・コース(教育プログラム)の単位で教育目標及び3つのポリシーを策定しております。

学士課程全学と、各学部の教育プログラムにおける教育目標及び3つのポリシーは、下記項目からご覧ください。

● 学士課程全学の教育目標及び3つのポリシーへ

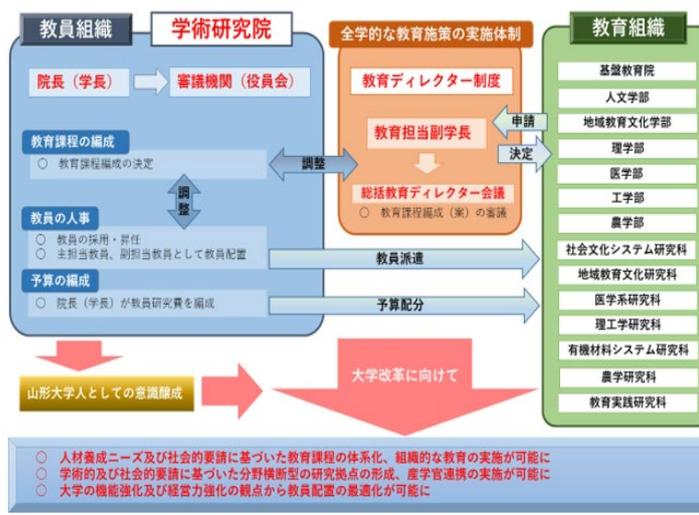
● 各学部の教育プログラムにおける教育目標及び3つのポリシーは、下記一覧表へ

学部	学科	履修コース	教育プログラム	学位
人文社会科学部	人文社会科学科	人間文化コース	人間文化	学士(文学)
		グローバル・スタディーズコース	グローバル・スタディーズ	学士(学術)
		社会法務コース	社会法務	学士(法学)
		地域公共政策コース	地域公共政策	学士(政策科学)
		経済・マネジメントコース	経済・マネジメント	学士(経済学)

URL: <https://www.yamagata-u.ac.jp/jp/university/policy2017/>

実際に整理したものは、現在こういった形でホームページで公開していますので、もしお時間、あるいは興味がありましたら、後ほど見ていただければと思います。

CA 教育プログラムの認定作業の定着



もう一つだけ山形大学独自の仕組みで、チェックのC、場合によってはPDCA全部に関わるかもしれませんが、教育プログラムの認定作業というのを定着させようというところで、本日お越しいただいています、安田理事を中心にやっています。皆さん少し違和感を覚えられたかもしれませんが、我々の肩書きって全部学術研究員という形で括られていたかと思いま

す。山形大学は平成27年度からですけれども、教員組織を一元化して、山形大学の教員全員を学術研究院という一つの組織、あるいは傘の下に置いています。その院長が学長でございまして、こちらにございますように、教育課程の編成とか、いろんなことに対して、教員を派遣できるような仕組みとして定着させていこうとしています。これまで教育プログラムは各学部で立て、ある程度学部の裁量で展開し、必要な教員を配置するというをやってきておりましたけれども、経営上、これからどんどん人員を増やしていくことは実質難しい状況ですので、リソースを最適化しながら教育課程を組んでいく必要があります。ですので、教員人事も含めてですけれども、いろんな意味で必要になってきます。

今後の展望

■ 分析結果の活用

- 1年終了時、3年終了時の基盤力テストの結果を用いたカリキュラムの点検・評価
- APの成果指標： 学生の授業外学習時間、卒業生追跡調査の実施率、基盤力テストの実施率のモニタリングと活用
- 学生へのフィードバック、ディプロマ・サプリメント

■ 質保証

- カリキュラム・チェックリスト+基盤力テストの結果を用いたプログラム・レビュー
- 3つのポリシーの実質化
- 継続的改善の循環プロセス(IE)の定着化

我々はこれまでの教育ディレクター制度も交えながら、実際には各学部で、さきほどお話ししましたけれども、ある程度カリキュラムを組んでいただいて、そのカリキュラムを大学全体として認定をして、そのカリキュラムに対してどういった先生を配置していくのが最適なのかということはこのスキームを使ってやっていこうとしています。現在、2年目

に入っております。3年・4年・5年ぐらいかけて学内に定着させていこうということもやっています。これができるかと、先ほどのチェックリストと合わせて、ある程度のカリキュラムと教員配置まで組み込んで、質保証という観点から対応できる方というふうに考えているところです。これまでのおさらいになりますけれども、分析結果の活用ということで、これまで御説明いたしました基盤力テストといったものを通じて、今お話ししたツールや体制を通じて、カリキュラムの点検評価をやっていくことを考えております。

APの成果指標もございますので、こういった部分については、今日御報告できていない部分も含まれていますが、しっかりやって追跡していくということが必要だと思います。また、これは安田さんのスライドにもありましたけれども、基盤力テストの結果は学生さんにフィードバックしたいというところもあります。これはAPの構想調書でも書いていますが、ディプロマ・サプリメントを通じて実施できるよう学内でいろいろ議論をしています。ポイントは大学だけに意味のあるものではなく、なかなか学生さんだったり社会だったりに認めていただけないので、トータルな形でお示しするのが良いのかということもこれから、先ほどの私の最初にスライドでお話しました、外部ステークホルダーの意見などもしっかり聞きながら使っていただければいいかなと思っています。質保証の観点からいきますと、先ほどお話ししました仕組みのカリキュラムのチェックリストと、あるいは基盤力テストを用いて、カリキュラムのどこに問題があつて基盤力テストの結果が振るわないとか、あるいは教育プログラム全体として見たときに、基盤力テストの結果から見てどのような状況なのかというのが、常にカリキュラムと照らし合わせるような状況ができればいいかなというふうに考えています。

こういった過程を通じて、実際にやった結果、3つのポリシーに沿ってしっかりと、我々が想定していた成果になっているかどうかということを検証しながら、改革を進めていこ



うというふうに考えています。これは継続的改善の循環プロセス、我々はIEという言葉を通じて定着させていこうということで現在取り組んでいるということでございます。以上、これまでの報告を総括するかたちで全体をまとめさせていただきました。